

虹

駄菓子に込めた願い

⑭ 子どもたちでにぎわう場所に



来店した子どもに声を掛ける川越さん(左)

シャッターの下りた店が目立つ砺波市のとなみ駅前商店街。午後2時すぎになると、近くのこども園から帰る親子連れが続々とやって来る。目当ての店は「あそふ駄菓子屋さん」。新型コロナウイルスの感染予防のため、1度に店に入れるのは5人まで。店の外では子どもたちが小銭をぎゅっと握りしめて中に入る順番を待つ。

串に刺したカステラや粉末ジュース、ラムネ、スティックゼリーといったお菓子が並ぶ光景は、色のごった煮のようだ。売れ筋は10～30円の価格帯。何十年も愛されている定番があれば、新顔もある。店にいても活気を感じる。

常連の平尾理奈さん(44)は「今日は100円までね」と、娘の優理花ちゃん(4)にかごを渡す。優理花ちゃんは熱心に商品を見渡し、アニメキャラクターの「プリキュア」が描かれたグミを手取る。その様子を眺めながら、平尾さんは「まずは娘が喜ぶし、親目線でいうと、子どもの計算の練習になるのがいい。土曜日には小学生のお姉ちゃんや夫とも一緒に来ます。私も大好きなお店です」と話す。

店主の川越美子さん(68)が笑顔で会計する。頭にはカラフルな三角巾を着けている。「息子のお嫁さんがくれたの」とお気に入りの様子だ。

店は遊び場でもある。誰でも自由に使えるけん玉やコマ、漫画がある。遊ぶことが子どもたちの成長につながるという川越さんの思いが込められている。店の外にはフラフープ。「小学生の頃はダッコちゃん人形を持ちながら回せたんだけど、今じゃ全然ダメ。でもコマ回しはまだ上手」と笑う。

◇

川越さんは以前、県内の心身障害者の支援施設に勤めていた。施設には障害がある子どもたちが暮らしていた。仕事は楽しかった。子どもたちといつも走り回った。洋服のたたみ方や、掃除など身の回りのことをちょっとずつ覚えていく姿を見るのが楽しかった。

1979年に養護学校教育が義務制になると、施設の子供もたちは養護学校に通った。施設で暮らす子どもはいなくなり、大人の利用者ばかりになった。少し寂しかったが、それでも「誰かの役に立てる仕事」とやりがいを感じていた。

27歳で結婚し、砺波の夫の実家に入った。

6人の子どもの恵まれた。休日には子どもたちを連れて、八尾の実家に遊びに行った。毎回のように立ち寄ったのが、富山市八尾町東町の駄菓子屋「こどもや村井商店」。戦後間もなく開店した歴史のある店だった。

子どもが大きくなると、今度は孫を連れて行った。どの子もみんな楽しそうにしていた。川越さん自身も童心に帰った。

店主の故村井コトさんに会うのが楽しかった。90歳すぎのはずなのに、暗算でお釣りを渡してくれる。背筋がピンと伸びている。孫たちに語り掛ける言葉は優しい。その姿に感心した。「あんな人になりたい」と思った。定年退職の日が近づくと、いつしか自身も駄菓子屋をやってみたいと思う



「タチアオイ」西 淳子

ようになった。

◇

退職すると、しばらく義母の介護に専念した。義母は社会的で明るい人だった。しかし、どんなに良い関係を築いていても、一日中介護していれば気詰まりする。生活に息苦しさを覚えた。新たな張り合いが欲しかった。

自宅から近いとなみ駅前商店街は、移り住んだ時期に比べて人通りがまばらになっていた。川越さんは、擦れ違うのもやっとだった夕市の光景が懐かしかった。「ここに駄菓子屋さんがあったら、子どもが来るかな」。自分の店を持つと心に決めた。

商工会議所の知り合いから、条件に合う店舗を紹介してもらえた。以前は美容院だったという。閉店後も地域のイベントに活

用されていた物件で、状態は良かった。

63歳での挑戦の原資は自身の退職金だった。息子たちに相談すると「母さんのお金なんだから好きにしたらいい。長いこと働いてきたんだからいいじゃないか」と背中を押してくれた。夫の勉さん(70)は当初反対していた。「駄菓子なんて売ってもたかが知れている。採算が取れないのは目に見えている。でも、執念に根負けしました」と笑う。

県内各地の駄菓子屋を訪ね、売れ筋の商品を調べた。大阪の間屋街を夫と訪ねたり、インターネットで取引先を探したりした。福祉に携わった経験から、施設の利用者や障害がある人が作った小物も積極的に取り

扱うことにした。「自分の作ったものが売れるとうれしいのはよく知っています。少しでも励みになったらいい」

「あそふ駄菓子屋さん」の名前は、南砺市出身の布絵作家、梅原麦子さんの作品「遊ぶ」から着想を得た。子どもたちが楽しそうに木の枝にぶらさがっている絵だ。店頭にも飾った。梅原さんに報告すると、喜んでくれた。「今の子どもはどうしても閉鎖的。自由に集まれる駄菓子屋のような場所があるのは大切なこと。地域の結び付きが弱くなった今、川越さんのような人がニコニコと子どもを見守っているのはいいことですよね」と梅原さん。

幸い、2016年の開店当初から店はにぎわった。営業日は週4日。義母がデイサービスを利用する日だった。店の切り盛りは大

変だったが、施設で働いていた頃のように生き生きとした。義母にも心に余裕を持って接することができるようになった。義母は2年前に旅立った。

いくつになっても人は成長できる。川越さんは当初覚えきれなかった商品の価格を頭に入れた。最初は遠慮がちだったが、暴言を言ったり、他の客に迷惑を掛けたりする子どもをしっかりと叱れるようになった。

店は子どもたちにとって学校でも、家庭でもなく、思い思いに過ごせる第3の居場所になった。店頭で待ち合わせする子も、宿題する子も、漫画を読む子もいる。

川越さんが特に印象的だったのは、学校の帰りにいつも立ち寄ってくれた女子高生だ。2年前のある冬の日、「私が将来やりたいことと、親がやらせたいことが違う」とぼつりと話してくれた。寂しそうな表情にそれ以上、詳しい話は聞けなかった。でも、店に来るたびに「頑張ってるね」と励ました。春になると「希望の大学に受かった。また遊びに来るね」と笑顔で報告に来てくれた。「役に立てたのかもしれない。店をやっていてよかった」と思った。

◇

開店する際に「10年はやる」と決めた。今年で5年。折り返し地点にいる。経営は厳しい。黒字になったことは一度もない。毎月家賃分の4万円が赤字になる。さらに昨年から新型コロナウイルスの影響で、地域の祭りやイベントが中止になり、売り上げは細っている。それでも「子どもたちといくと、エネルギーをもらえる」と言う。

区切りとなる5年後には、73歳になる。「その時は車椅子かな。いや、今の時代なら元気な人は多いか。だったら、もうちょっとやってみようって思っているかもしれない。喜んでもらえる限り続けたい」。頭の中には、駄菓子屋を始めるきっかけになった八尾の女性店主の姿がある。

6月末、店の前に笹飾りを設置した。七夕が近づくと、店に来た人に短冊を書いてもらっている。風に揺られる色とりどりの願い事を眺めていると、気分が華やぐ。

駄菓子屋さんは子どものための場所ですが、大人が行っても楽しいです。幼い時に食べたであろうお菓子を口にする、思い出すことがいろいろとあります。今の子どもたちも大人になったら、同じように感じるのでしょうか。こんな店が身近にあるのは、幸運なことです。小銭を握りしめて、ぜひ足を運んでください。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773

次回掲載は8月1日(日)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社営業局